

日韓文化交流基金 NEWS

2013.3.29 NO.65

The Japan-Korea Cultural Foundation

Contents

- 1 新任のご挨拶
日韓文化交流基金理事長 小野正昭
- 2-3 日韓文化交流基金講演会
「韓(から)くにを旅して43年—その軌跡」
写真家 藤本巧
- 4 「アジア大洋州地域及び北米地域との
青少年交流(キズナ強化プロジェクト)」
派遣事業
- 5 第12回日韓歴史家会議
「世界史における中国」
- 6-7 フェロー研究紹介
日韓FTA(自由貿易協定)の障害要因
韓国対外経済政策研究院研究委員
鄭成春
- 8-9 フェロー研究紹介
韓国併合による王公族の創設と
天皇制の変容に関する研究
新潟大学大学院現代社会文化研究科助教
新城道彦
- 10-12 日韓文化交流基金事業報告
(2012年10月~12月)



長安高等学校でのプレゼンテーション (p4)

新任のご挨拶

日韓文化交流基金理事長 小野正昭



このたび内田富夫前理事長の後任として日韓文化交流基金の理事長に就任いたしました小野正昭(おの まさあき)と申します。

1970年に外務省に入省して、一昨年5月に退官するまで41年間外交に携わって参りましたが、この間1990年から93年まで3年間、ソウルの日本大使館参事官として政務を担当し、また1997年から2000年まで3年間、ニューヨークのKEDO(朝鮮半島エネルギー開発機構)本部の日本代表として多くの韓国の同僚と苦楽を共にしました。また、KEDOにおいては、北朝鮮の核開発阻止のため、韓国の代表と共に度々北朝鮮に出張し、南北分断の厳しい現実を実感するとともに戦前の日本人の活動に想いを馳せたりもしました。

国家間の友好の礎は国民レベル、とりわけ青少年の交流の積み重ねにある。私は常々そのように考えています。

日韓文化交流基金は今年、創設30周年を迎えます。基金の創設には当時の両国の政界・財界人の熱い想いがありました。それは「両国は、古代より交流の歴史を有し、地理的に最も近い特別な関係にあるにもかかわらず国民相互の信頼は未だ十分ではない。信頼関係の樹立は両国のみならず、アジアひいては世界の平和と繁栄に不可欠である。」との共通の想いでした。この精神は基金創設者の一人である故花村仁八郎会長の「日韓文化交流はわが天命なり」の言葉に象徴的に示されています。

爾来、今日までに2万5千人以上の日韓の青少年が交流を重ねてきました。「日本は私の運命だから」と書いた韓国の留

学生、「被爆者への想いは韓国の学生の方が深かった」と書いた日本の学生など、それぞれが交流を通じ相互理解のすそ野を広げています。更に、本年1月安倍総理がインドネシアで発表した「JENESYS2.0」は心強い施策であり、今後、日韓の青少年交流がさらに拡大、深化することが期待されています。私と致しましても新しい時代の要請に応えつつ、効果的な事業を展開するよう力を尽くして参る所存です。

最後に、交流事業は多くの方々の協力の下に一つ一つ手作りで実施される息の長いものと考えています。この「基金NEWS」の読者の皆様にも引き続き、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。新任の挨拶とさせていただきます。

小野正昭 (おの まさあき)

PROFILE

- 1970年 一橋大学経済学部卒業
外務省に入省
- 1990年 在韓国日本国大使館政務担当参事官
(1993年まで)
- 1997年 朝鮮半島エネルギー開発機構日本代表
(2000年まで)
- 2001年 外務省領事移住部長
- 2003年 在ポーランド日本国大使
- 2006年 外務省科学技術協力担当大使
- 2007年 在メキシコ日本国大使
- 2011年 外務省退官
- 2013年 日韓文化交流基金理事長(現職)

私を韓国に向かわせたもの

私が写真の道を志したのはまだ10代の頃のことです。ヌーベルバーグに傾倒し、ミケランジェロ・アントニオーニの映画に映し出された、数カットの日雇い労働者の写真を見た時、あんな写真が撮りたい、そう思いました。カメラを購入した私は西成に日雇い労働者の写真を撮りに行ったりしていましたが、どうもじっくりいかない、手ごたえがありませんでした。その頃、雑誌『工藝』で一枚の写真を見つけました。朝鮮の牛市の写真でした。この雑誌は柳(やなぎ)宗悦(むねよし)が民藝の啓蒙を目的として発刊したのですが、その69号に朝鮮の紀行文が寄せられていたのです。

日本民藝館が設立されたのが1936年ですが、この紀行文はその調査のために旅した時のものだったと思われる。当時の朝鮮の工芸や工人たちの写真の最後に、牛市の写真がありました。それを見た時、こんな写真が撮れたらと思ったのです。この紀行文は柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司が3人で旅した朝鮮の記録です。当時私の家には柳宗悦の写真が飾られていました。民藝運動に賛同していた父が飾ったものですが、来客はこの写真を見て、私の祖父と勘違いしたりしたものです。

当時は今のように簡単に韓国旅行のできる時代ではありませんでしたが、たまたま河井寛次郎さんのインタビューテープを聞く機会がありまして、生の声を聴いてしまうと、やはり行ってみたいという思いがさらに募ってきてしまいました。

柳宗悦の旅を辿る

こうして私は1970年に初めて渡韓することになりました。同行した父はすでに2度ほど渡韓経験がありました。テープに録音された道程を辿るこの旅が、私の42年間の韓国とのかかわりの始まりでした。70年という大阪万博の年。日本は高度成長まっしぐらの時期です。柳宗悦が韓国で同じ道を歩いたのは、すでに30年以上前のことでした。もちろん宗悦



「村道(高霊)」1970

が歩いた当時の風景は撮れませんが、工芸品の背景となる風景が撮れたなら、という思いで韓国に向かいました。この頃はまだ韓国入国に際してビザも必要でしたし、出入国時には税関でカメラやフィルムのチェックが厳しくて緊張しました。撮った写真が税関で引っかかるのが一番怖かった時代です。

行程の第一歩は浅川巧の墓参りです。私の父は島根県の宮大工13代目で、木工や工芸にも関心を持っていましたが、10代の頃に柳宗悦の著作『私の念願』に書かれていた「浅川巧のこと」を読んで、将来、息子を儲けたら巧と名付けようと決めていたというのです。その縁で、まずは浅川巧の墓参りに向かったわけ。行ってみますと、きれいに掃除され、花が供えられています。聞いてみると、毎日訪れる人がいるというのです。

墓参りを済ませた私は列車で栄州、金泉を巡りました。父は同行せず、仁寺洞(ソウル)で工芸品を見て回っていました。私は道案内の青年と一緒に安東、栄州を巡り金泉で父と合流して、海印寺、高霊、南原を經由して通度寺まで各地を撮影して回りました。宗悦らが歩いた工芸の道を自分の足で巡り、韓国の工芸の背景を撮影することができたのです。この旅で私の目的は果たせたと思えました。

生涯の師、昔度輪(ソクドリョン)との出会い

ところが私はこの旅の最後の日に昔度輪先生(韓国美術評論家)に偶然お会いしたのです。先生の韓国の美についての話を聞いて、韓国の原風景をもっと撮りたいという思いに駆られました。帰国後、私は先生に弟子入りを申し出ました。こうして1972年から昔先生とともに古寺巡礼の旅に出たのです。先生は寺での修行の経験もありましたので、普通なら一般人が入れないような場所にも行けました。修行僧の剃髪の写真、座禅をしているところなども、先生と一緒にだったので撮れました。数日でしたが僧房に泊まり修行僧と生活を共にしました。2010年にソウルの国立民俗博物館のスタッフと通度寺を訪れた時、僧侶の修行しているところを再度撮影することを申し出たのですが、たとえ高貴な人であっても、修行の場などに立ち入ることはできない、といわれました。

釜山近くの国清寺という寺を訪れた時、たまたま葬式に遭遇しました。古式に則った未晒しの麻の喪服を着た老人が大雄殿から出てきたとき、その美しさに驚き無我夢中でシャッターを切りました。しかし隣に佇む息子の姿を見て、ファインダーを覗くことを止めました。彼はワイシャツの上に喪服を着て、革靴を履いていたのです。この頃韓国ではセマウル運動(新しい村作り)が始まり、原風景が急速になくなり始めていました。藁ぶき屋根がスレート屋根にとって代わり、近代化が地方にも押し寄せていました。シャッターを切ろうとしない私を見て、昔先生はこれも韓国の文化であると叱られました。

「君は美しさの本質を分かっていない」それは表面的な美しさでしか韓国を見ていない、もっと広い視野で見るべきだとたしなめられました。そのころ民藝運動の賛同者のなかには、その国の民俗の背景を通り過ぎて物の美しさだけを見て良し悪しを決める傾向がありました。私もそのような観点から韓国にレンズを向けていることに気がついたのです。この時が転機となり、私は新しい視線で韓国を撮影するようになりました。



1974年に昔先生との旅の思い出を一冊の本『韓びと』（私家版で400冊）にまとめました。昔先生には「韓国の根源の美しさを表現できたな」と喜ばれましたが、日本の大型書店に十冊委託してもらいましたが一冊しか売れませんでした。しかし、私にとって昔先生の言葉が大きな支えとなり今日に至っております。

「喪主と靴(釜山)」1972

念願の招待展へ

1975年頃から私は一人で旅をするようになりました。まだ外出禁止令(0時から4時まで)があった時代です。この頃撮ったジャガルチ市場の写真を『韓くにの風と人』、お寺を『韓くに・古き寺』、農村を『韓くに幾山河』として上梓しました。この三部作は写真だけを直視してもらおうと、まったく説明文を入れませんでした。その後、写真だけでなく記録として文章も書くようになりました。2006年に出版した『韓くに、風と人の記録』は、韓国を通してお世話になった方々の文章とともに一冊に構成した写真集です。これでやっと私と韓国の旅が終わったような気がしました。

しかし、振り返りますと、私は韓国の地でまだ展覧会をしたことがなかったのです。できれば自主ではなく韓国の人たちの手で催されることを願いました。その時が来てはじめて私の写真が韓国の人たちに受け入れられたと思えるからです。

2010年、仁寺洞にあるギャラリーから招待展として写真展を開催することができました。オープニングには韓国の著名な方々が来廊されました。ある人から「貴方の写真を韓国に寄贈してくれないか?」と言われました。展示している40数点を寄贈してもいいと軽い気持ちで了承したところ、それから数ヶ月後、その人から寄贈先がソウルの国立民俗博物館

に決まったという知らせがありました。ところが寄贈の申し出は、これまで撮った韓国のすべての写真ネガをと言われたのです。さすがにそれには驚き断りかけましたが、その時浅川巧の「朝鮮のものは朝鮮の地に」ということばを思い出したのです。また博物館のスタッフがまとめてくれた私の写真リストの出来栄えに感動して、韓国国立民俗博物館で永久保存されることが、これまで撮り続けてきた「写真ネガ」の居場所だと考えました。

寄贈したのち、私は新しい目標ができました。それは韓国民俗の50年誌です。今43年ですからあと7年。50年経てばこの国の人たちが気がつかなかった部分が浮き上がるのではないか、そのためには体力も経済力も必要ですが、何よりも行動だと思います。被写体に近づいて写真を撮ることは非常に勇気のいることで、ジャガルチ市場で働くアジュンマの姿を1m手前でシャッターを切るにはお酒の力を借りることもありました。条件が厳しくても映像を残したいと思う気力が絶えないかぎり、写真が撮れると思っております。韓国の人たちが気がつかない「ありふれた風景」。どこへ行っても自分なりに面白いところを見つけながら、これからも取材することが、私のライフワークです。



「露天商の喧嘩(ジャガルチ市場)」1975



ふじもと たくみ
藤本 巧

PROFILE

1949年、島根県に生まれる。写真家。二十歳から韓国の風土と人びとを撮り続ける。著書に『韓くにの風と人』ほか三部作(フィルムアート社)、『韓くに風の旅』(筑摩書房)、鶴見俊輔共著『風韻 日本人として』(フィルムアート社)など。1987年度咲くやこの花賞受賞。韓国・2011年度文化体育観光部長官賞受賞。2012年には韓国国立民俗博物館にて「韓国を愛する巧写真展 7080過ぎ去った私たちの日常」展を開催。

「アジア大洋州地域及び北米地域との 青少年交流(キズナ強化プロジェクト)」

派遣事業

宮城県・岩手県高校生訪韓研修団

日本大学生訪韓研修団

「キズナ強化プロジェクト」の一環で実施されている派遣事業では、東日本大震災からの復興に取り組む日本の姿を伝えることを目指し、被災地の青少年を海外に派遣しています。

当基金では被災地の中高生、大学生、教員を韓国に派遣する事業を担っています。ここでは宮城県と岩手県の高校生、被災地の大学生などから構成された訪韓研修団が、韓国の高校や大学で震災被害や復興への取り組みを発表した様子をお伝えします。

宮城県高校生訪韓研修団

本団は県内9校の高等学校47名の生徒で構成され、そのうち被災体験のある複数の団員による発表を行いました。発表は水原市にある梅香女子情報高等学校の生徒との交流時と、一山にある中山高等学校訪問時の2回行われました。

自宅が被災した団員による写真の説明に始まり、避難所での生活の様子が報告され、被災者が支えあって暮らす一方、時間の経過とともに様々な課題が浮き彫りになったことが紹介されました。また、避難所で暮らす子供たちのサポートにかかわった団員の体験談が紹介され、被災当時中学3年生だった団員たちが、自らも被災者でありながらも幼子たちを支えようと努力した様子は、特に強い印象を与えたようです。

韓国側生徒からは、「ニュースなどで見聞するものよりもはるかに実感できた」「発表すること自体が辛いであろうに、真摯に訴えかけてくる姿に心打たれた」といった感想が聞かれました。また、日本側団員もその様子を見て、発表の手ごたえを感じたそうです。

発表後は授業体験などのほか、生徒宅でホームステイも行いました。翌朝の集合時にはすっかりパートナーと打ち解けた様子で、出発時は涙で別れる姿が多くみられました。交流を振りかえり、団員は「韓国の生徒が(震災を)“日本で起きた不幸なこと”から“友達に起きた辛いこと”として考える対象になったのではないかと、韓国の生徒との距離がより近づいたことを実感していました。



発表資料に見入る団員と梅香女子情報高等学校の生徒
(宮城県高校生訪韓研修団)

岩手県高校生訪韓研修団

本団は県内1校の高等学校50名の生徒で構成され、被災体験のある団員のほか、釜石市の仮設住宅や宮古市の高校を訪問した団員による発表を行いました。

発表は水原市にある長安高等学校で行われました。ここでは1・2年生700名ほどが参加する歓迎式での発表となり、団員はその熱い歓迎ぶりに感激すると同時に緊張した中での発表となりました。大きなスクリーンに動画や写真を映し、中でも津波の映像が流れた時は長安高等学校の生徒からどよめきが起ころ、また同校の生徒は辛そうな表情をしながらも真摯に耳を傾けていました。訪問校の生徒らの反応を直接

肌身で感じ、団員らは伝えたいことは伝わっていると感じたようです。また現在仮設住宅に住んでいる団員からは、その不便さを感じつつも、より良い生活を送れるように協力し合い、自身も困難に立ち向かう日本人の強さと互いを思いやる優しさを感じたことや、日本が力を合わせて復興、再生に向けて頑張っていることを伝えました。

発表後は授業体験などのほか、生徒宅でホームステイも行いました。短い交流期間でしたが、団員は「今回の発表やホームステイでは“言語の壁を越えて伝える難しさ”を痛感したが、それでも韓国の方々から暖かく接してくれ、彼らに対する思いが変わった」「復興に向けて頑張っていることがよく伝わったと思うが、私たちが韓国を訪問し元気だと証明できたことが何よりだった」と訪問の成果を述べていました。

長安高等学校でのプレゼンテーション
(岩手県高校生訪韓研修団)



日本大学生訪韓研修団

本団は、岩手、宮城、福島、茨城の各県から参加した大学生のほか、震災後にボランティア活動を行った大学生28名で構成されました。

韓国滞在中、一行はソウル市内の韓国外国語大学校を訪れ、同大学校の日本語科の学生たちと交流を行い、韓国側の学生を前に、団員から東日本大震災の被災と復興の状況について発表する時間をもちました。

発表では、一行は岩手県沿岸地域では地震の揺れよりも津波によって大きな被害が出た状況や震災後に地元の学校でボランティアとして活動した時の話、また地域の活性化を目指して取り組んでいる自治体のプロジェクトなどについて紹介しました。

このほか、東日本大震災を通して家族、友人の大切さを実感したことや決して忘れてはいけない出来事であると韓国側の学生に伝えました。

韓国側の学生からは、「被災地の実情がわかり安心した。また日本を訪れたいと思った」「学生たちの体験を聞くことでより実感をもって理解することができた」などの感想が述べられました。発表を終えた団員の一人は、「情報発信を通して、韓国の学生が日本に関心を持ってきていることを実感できてうれしかった」と喜びを語っていました。

第12回日韓歴史家会議「世界史における中国」

2012年10月26日(金)から10月28日(日)の3日間、東京の<ホテルアジア会館>にて、第12回日韓歴史家会議が開催されました。

この会議は、2001年に日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」として発足しました。日本史、韓国史の専門家だけでなく、幅広い分野の歴史研究者が年1回の会議に参加し、最新の歴史研究の成果をもとに意見交換と討論を行っています。

今回は、大主題「世界史における中国」のもと、第1セッションにおいて両国の研究者各1名が「中国をどう認識するか」をテーマに基調報告を行いました。その後、「世界史と中国」、「自国研究と中国研究」という小主題のもとで基調報告に対する討論報告と議論が行われ、各セッションで活発な討論が展開されました。

10月26日には講演会「歴史家の誕生」を開催し、荒井信一茨城大学名誉教授と韓永愚ソウル大学校名誉教授が、研究者を志してから現在に至るまでの道のりや、研究の転機となったできごとなどについて語りました。

参加者

■日本側(敬称略、五十音順)

秋田茂(大阪大、イギリス帝国史)、荒井信一(茨城大、西洋史、国際関係史)、井口和起(京都府立大学名誉教授、日本近代史)、板垣雄三(東京大学名誉教授、イスラム学)、小澤弘明(千葉大、中東欧近現代史)、糟谷憲一(一橋大、朝鮮近世・近代史)、菊池秀明(国際基督教大、中国近代史)、岸本美緒(お茶の水女子大、中国明清史)、木畑洋一(成城大、国際関係史)、久保亨(信州大、東洋近代史)、近藤成一(東京大、日本中世史)、須田努(明治大、日本近世史・近代史)、高見澤磨(東京大、中国法)、豊島悠果(神田外語大、高麗史)、中兼和津次(東京大学名誉教授、中国経済、開発経済学)、濱下武志(龍谷大、アジア近代史)、東島誠(聖学院大、歴史学)、堀内和宏(早稲田大、日本古代史)、三谷博(東京大、日本近世近代史)、宮嶋博史(成均館大、朝鮮史)、吉田光男(放送大、韓国・朝鮮近世史)

■韓国側(敬称略、カナダラ順)

金光億(ソウル大、社会人類学)、金基鳳(京畿大、歴史理論、史学史)、金學俊(東北亜歴史財団、歴史学)、朴檀(西江大、ヨーロッパ現代史)、朴漢濟(ソウル大、中国史)、延敏洙(東北亜歴史財団、日本古代史)、李泰鎮(国史編纂委員会、韓国近代史)、鄭多函(祥明大、韓国近世史)、曹秉漢(西江大、中国思想史)、車河淳(西江大、思想史)、韓永愚(ソウル大、朝鮮時代史)

第2部討論「自国研究と中国研究」

日程

10/26 (金)	<p>日韓歴史家会議開催記念講演会「歴史家の誕生」 司会:宮嶋博史(成均館大) 荒井信一(茨城大) 「近代歴史学の形成とコロニアリズム」 韓永愚(ソウル大) 「私が歩んできた歴史学の道」</p>
10/27 (土)	<p>1. 基調報告 中国をどう認識するか 司会:宮嶋博史(成均館大) 報告:濱下武志(龍谷大)「グローバルに中国をどう認識するか」 報告:曹秉漢(西江大) 「世界化時代の中華帝国の伝統と中国文明の未来」 全体討論</p> <p>2. 第1部討論 世界史と中国 司会:木畑洋一(成城大) 討論報告: 秋田茂(大阪大) 「グローバル経済史研究からのコメント」 金基鳳(京畿大) 「西洋の鏡に映った中国」 中兼和津次(東京大) 「中国の経済成長と中華ナショナリズム」 朴漢濟(ソウル大) 「『巨大中国』の形成過程と中国的な拡大方式 - 『中華主義』と中国 -」 全体討論</p> <p>3. 第2部討論 自国研究と中国研究 司会:井口和起(京都府立大) 討論報告: 東島誠(聖学院大) 「いわゆる『中国化』論と『中国に向かう現代』」 鄭多函(祥明大) 「『事大』という枠組みの超国家的(Trans-national)な脈絡」 須田努(明治大) 「中国化の限界から脱中国へ向かう日本の近世-民衆の自他認識-」 金光億(ソウル大) 「韓国社会科学界の中国認識と中国研究:人類学者が見た歴史記憶の政治学」 全体討論</p>
10/28 (日)	<p>4. 総合討論 司会:木畑洋一(成城大)・宮嶋博史(成均館大)</p>

日韓FTA(自由貿易協定)の障害要因

日韓関係を取り巻く環境

2013年、日本と韓国で新政権がスタートする。これらの新政権下で日韓関係はどう変わるのか、関心が集まっている。新政権は、2012年後半から急激に悪化した日韓関係を改善することができるだろうか。日韓関係を取り巻く対内外的環境を見ると関係改善には相当な努力が必要だろう。

韓国は日本の安倍新政権を警戒している。安倍新政権の政策が韓国の脅威となると見ているからである。例えば、安倍政権は領有権問題(竹島/独島問題)、歴史問題(慰安婦問題)そして安全保障問題(軍事力強化)で周辺国に強硬な姿勢を見せるだろう。一方、韓国の新政権は日本より中国を重視する可能性が高くなっている。韓中FTA交渉開始はその一つの現れだろう。韓国は政治経済的に弱体化する日本との関係改善より、ますます成長していく中国との関係を重視していくと思われる。尖閣諸島をめぐる日中の対立によって日本の対中輸出は大きなダメージを受けた。韓国の対中依存は日本より高く、もし中国との関係が悪化したらその経済的な悪影響がどれほどになるか、計り知れない。そのため、韓国は経済的打撃を受けないですむように、中国との関係をより重視していくだろう。このような環境の中で、良好な日韓関係を取り戻すには相当な努力が必要になるだろう。

日韓FTA交渉の経済的障害要因

日韓関係を改善する方法として日韓FTAがある。日韓FTA交渉は2003年12月に開始したが2004年11月に中断してしまった。その後、韓国は米国、EU(欧州連合)、インドなど巨大経済圏とのFTA交渉を成立させた。また現在は中国とのFTA交渉を行っている。それではなぜ日韓FTA交渉は順調に進まないのか。韓国の立場から見て次のような経済的、また政治・外交的理由が考えられる。経済的理由として、①貿易赤字がさらに膨らむ、②日本企業の韓国投資が増加するとは限らない、③部品素材の日本依存が高まる、④日本は農業の開放に消極的である、⑤日本は非関税障壁の撤廃に消極的である、⑥韓国の自動車業界の反対が根強い、⑦日本市場に輸出する韓国企業を保護するための防衛的FTAを結ぶ必要性が低い、といった点があげられる。

韓国政府は日韓FTAを締結すると対日貿易赤字が拡大すると見ている。日本の関税率はすでに低く日本市場はさまざまな非関税障壁があるので、韓国製品の対日輸出増加は限定的だと見られる。一方、韓国の関税率は日本より高いので関税撤廃は日本からの輸入を急増させ、すでに高い水準にある対日貿易赤字をさらに拡大させると懸念される。

日韓FTAを締結しても日本企業の韓国への投資がどれほど増えるかは不確実である。日本企業の韓国投資のパターンを見ると、主に韓国の大企業向けの部品や素材を生産するた

めの投資が多い。韓国の立地的長所を活かすための投資は少ない。日韓の間には投資協定もすでに締結されている。そのため日韓FTAを締結しても日本企業の韓国投資が大きく増えるとは限らない。また、過去の経験から見ると日本企業の海外投資は為替レートにより大きく左右されていることが分かる。

韓国の部品素材産業は大きく成長してきた。韓国の輸出の約半分は部品素材であり、韓国の貿易黒字に大きく貢献している。それにもかかわらず韓国の部品素材産業は日本に対して貿易赤字を記録している。また部品素材の日本依存度(日本輸入/世界輸入)は、2001年28.1%から2010年25.2%へと若干低下したものの、依然として高い水準である。韓国政府はこの対日依存を下げることを重要な政策目標にしている。日韓FTAは部品素材の日本依存度を逆に高めるのではないかと懸念されている。

日本が締結した過去のEPA(経済連携協定)を見ると、日本がどれほど農業の開放に消極的か分かる。日本は農産品目の約半分しか開放していない。韓国にとって日本は最大の農産品の輸出先である。韓国の農産品輸出額(2010年)は59億ドルであったが、その中で19億ドル(32%)が対日輸出であった。だから韓国は日本の農業市場開放に関心が高い。経済的な側面だけでなく政治的な側面でも農業市場開放は重要である。農産品輸出拡大は、韓国政府にとっては数少ない明るい材料だからである。しかし、日本政府は農業市場開放に極めて消極的である。

非関税障壁も大きな壁である。すでに述べたように、日本は関税率が低い上に日本的な取引慣行が多く、これが韓国企業の日本進出に大きな壁になっている。韓国はこの非関税障壁を取り除くことに高い関心を持っているが、日本はそもそも非関税障壁というもの存在しないと見ている。この大きな認識の違いが交渉の妨げになっている。しかし、最近、日本政府はEUとのFTA交渉を進めるために日本の非関税障壁を取り除くと宣言し、非関税障壁へのアプローチに変化が見られるようになった点は注目すべき内容である。

韓国の自動車業界は日韓FTAを懸念している。現代自動車は日本市場に進出しようとしたが失敗した経験を持っている。一方、輸入車の市場占有率はますます増えている。例えば、韓国における2012年の輸入車の市場シェアは10%を超える勢いである。今後5~6年かけてこの市場シェアは20%を超えると予想されている。韓国の国内自動車メーカーはこのような輸入車の氾濫を警戒している。日韓FTAはこの傾向に拍車をかけるだろう。ただし、最近、円高を背景にして、韓国の部品メーカーの対日輸出が増えているのは、韓国にとって明るい材料である。

日本のFTAネットワークが脆弱なもの日韓FTAへの障害

日韓FTA交渉の障害要因

区分	障害要因
経済的障害要因	韓国貿易赤字がさらに膨らむ 日本企業の韓国投資が増加するとは限らない 韓国における部品素材の日本依存が高まる 日本は農業の開放に消極的である 日本は非関税障壁の撤廃に消極的である 韓国の自動車業界の反対が根強い 韓国は防衛的な意味での日韓FTA締結の必要性が低い
政治・外交的障害要因	韓国国民の被害意識が強い 日本の政治や交渉体制への不信感 韓国政府は韓国国民を説得する材料を見つけれられていない 両国ともに巨大経済圏とのFTAで忙しい 東アジアにおける日本のリーダーシップへの不信感

要因の一つである。日本が多く国・地域とFTAを締結しているならば、韓国は日本市場での不利な状況を解消するために日本とのFTA締結に積極的になるはずである。しかし日本はそのようなFTAネットワークを整備していない。いわゆる防衛的な意味での日韓FTAを急いで締結する必要性は、あまりない。

日韓FTA交渉の政治・外交的障害要因

政治・外交的な理由として考えられるのは、①韓国国民の被害意識が強い、②日本の政治や交渉体制への不信感、③韓国政府は韓国国民を説得する材料を見つけれられていない、④両国ともに巨大経済圏とのFTAで忙しい、⑤東アジアにおける日本のリーダーシップへの不信感などがある。韓国国民は日本の植民地支配への清算がまだ終わっていないと思っている。このような被害意識は何らかの補償を求める心理につながる。日韓FTA交渉でもこのような補償心理が働く可能性もある。日本の譲歩を求める心理である。韓国は日本の政治や交渉体制にも不満がある。迅速な意思決定と確固たる実行力が必要であるが日本にはこれが足りない。交渉に時間がかかり方向が見えない。日本との交渉において、このような不満と不安があり、韓国政府は国民を説得するための材料を見つけれられていない。こういうメリットがあるから日韓FTAは必要だという明確な理由が足りないのである。また、日韓両国は米国、EUなど巨大経済圏とのFTAで忙しかった。最近、日本はEUとのFTAやTPP（環太平洋連携協定）参加問題で忙しい。また日中韓FTAやRCEP（東アジア地域包括的経済

連携）など多国間FTAを重視するようになっている。東アジアにおける日本のリーダーシップも不透明なままであるし、韓国との二国間レベルでの交渉はますます後回しになる。

日韓関係の改善に向けて

韓国にとって日本は大事なパートナーである。しかし、時代は日韓関係にとって悪い材料をたくさん生み出している。このような悪条件を乗り越えて良好な日韓関係を取り戻すためにはどうすればいいのか。日韓両国の知恵が求められている。まず、日本は周辺国を刺激しそうな政策は取りやめるべきである。その政策は東アジアの不安をあおるだけである。韓国は周辺国と均衡の取れた政治・経済・外交関係を築くべきである。どこかに偏った政策はやめるべきであろう。



チョンソンチュン
鄭成春

PROFILE

ソウル大学校経済学部(学士、修士)卒業。2002年3月、一橋大学大学院経済学研究科(経済学博士)卒業。2003年より韓国対外経済政策研究院の研究委員として活動(在職中)。専門は日本経済、環境経済。著書に『日本の締結済みEPA分析と韓日FTAへのインプリケーション』(共著、2008、対外経済政策研究院)、『日本の低炭素社会戦略についての研究』(共著、2009、対外経済政策研究院)などがある。

韓国併合による王公族の創設と 天皇制の変容に関する研究

韓国併合と皇帝の処遇

帝国とは皇帝が統治する国を意味する。皇帝は一国に一人しか存在できない。韓国併合によって天皇が統治する大日本帝国に韓国皇帝を編入したとき、どのような葛藤が生じたのだろうか。そのような疑問を解決すべく王公族¹の研究を進めている。

王公族の正統である李王家には大韓帝国時代の皇室費と同額の150万円が支給された。併合当時、日本の総理大臣の年俸が約1万2000円だったので、厚遇のほどがわかる。1927年に日本の皇族は11宮家いたが、その皇族費すべてを合計しても李王家歳費の半額程度であった。

こうした優遇は、韓国併合が占領ではなく、名目上「合意的条約」によって成立したことに関係する。条約である以上、韓国皇帝の締結意思を引き出さなければならない。そこで、併合の予備交渉では統監府から韓国政府へ皇帝一族を厚遇する旨が伝えられた。すなわち、フランスがマダガスカル王を孤島に追放したり、アメリカがハワイ王を市民に落とした例を引き、これに対して日本は韓国皇室に皇族の礼遇を保障し、今日と同額の歳費を支給すると説明したのである。

日本は当初、併合後の韓国皇帝に「大公」の尊称を用意していた。しかし韓国側が条約締結の要件として国号と王称の維持を強く求めたため、最終的に「王」となる。だが、単に王として日本に編入すると将来的に「朝鮮王」を名のり、天皇とは別の朝鮮の統治者が存在するような誤解を生む危険性があった。それゆえ、称するときには韓国皇室の姓である「李」をつけて「李王」にするという措置がとられる。王公族が特に李王家と呼ばれる所以はここにある。

正式な名は高宗か李太王か？

呼称に関連して私見をひとつ。併合によって韓国の太皇帝は李太王となり、皇帝は李王となった。それぞれ高宗・純宗として知られる人物である。最近では少なくなったが、学生のころに研究発表で李太王・李王という言葉を使うと、かぎ括弧（「 」）をつけるよう批判された。たぶん日本が押しつけた仮の名だから、そのまま使うのはふさわしくないという指摘なのだと思う。しかしそれならば、高宗・純宗にも等しくかぎ括弧をつけなければならない。

高宗・純宗は併合以前から使われた朝鮮固有の呼称と思っている人は少ない。そもそも○宗や○祖というのは廟号であり、歴代の王を祀る廟に載せるための名前である。当然ながら死後つけるものであって、生前に廟号で呼ぶことはない。高宗は李太王の死後6日目の1919年1月27日に、宮内省の一組織である李王職が神宗・敬宗を含む三案から選んだものである。純宗も李王の死後6日目の1926年5月1日に、李王職が敬宗・誠宗を含む三案から選んだ。歴史辞典などでは、高宗を「李朝第26代の王」と説明する一方で、李太王は「日韓併合後つけられた名称」としている。これでは高宗・純宗

が本来の名であり、併合以前から用いられていたかのような誤解を与えかねない。



1918年頃の李太王
(出典:『皇室皇族聖鑑 大正編』
みやこ日報社、1935年)

実証研究の遅れ

これまで王公族に関する実証的な研究はほとんどなく、伝記・自伝によって一人歩きした言説も少なくない。

旧韓国皇太子・李垠は併合後に皇族・梨本宮守正の長女方子と結婚したことで有名である。本田節子『朝鮮王朝最後の皇太子妃』、福富哲『無窮花』などでは、彼に閔甲完という婚約者がいたということをまことしやかに論じている。すなわち、李垠は1907年3月12日に結婚相手を選ぶための初揀択²をおこない、閔泳敦の娘・甲完を妃候補として選定した。だが、1910年に併合が成立すると、皇族女子との結婚話がもちあがり、日本にとって甲完の存在が邪魔になった。そこで、初揀択の結果が無理やり取り消され、甲完は一生独身で過ごしたというのだ。これは甲完の自伝『百年恨』にもとづいた記述である。

しかし、『高宗実録純宗実録』によると初揀択で選ばれたのは閔鳳植の娘、金容九の娘、曹秉集の娘、沈恒燮の娘、宋炳喆の娘、金鉉卿の娘、洪淳範の娘の7名であり、閔甲完に該当する記述はない。また甲完は『百年恨』で、初揀択の会場に軍服を着た伊藤博文が同席していた様子を劇的に叙述しているが、このとき伊藤は日本におり、門司から韓国に渡ったのは初揀択から一週間後のことであった。したがって、閔甲完の証言には様々な矛盾があり、『百年恨』やそれをもとに書かれた伝記類の史的価値は低いといえよう。



李垠と伊藤博文(出典:李王垠伝記刊行会編
『英親王李垠伝』共栄書房、1978年)

調査結果と今後の関心

新潟大学への赴任が突然決まり、フェローシップの研究期間は2012年の夏1カ月だけとなってしまった。しかし、それでもソウル大学校奎章閣国際韓国学センターで有意義な研究生活を送ることができた。受け入れを了承してくださった朴泰均教授には改めて御礼申し上げたい。

フェローシップ中は奎章閣を拠点にしつつ、ソウル大学校中央図書館、落星堡経済研究所、国立中央図書館に足繁く通い、史料調査を行った。ソウル大学校では植民地期の新聞を閲覧し、併合時に実施した「王冊立」の儀式に関する記事を手に入れた。これにより、韓国人が王公族の創設をどのようにとらえていたか窺い知ることができるため、近日中に文章化して発表したいと思っている。

落星堡経済研究所では忠清北道の儒生・金麟洙が遺した『致齋日記』を閲覧した。彼は併合後も和装・洋装を避けて伝統的な衣冠を身につける保守的な人物であった。それでも日記のなかでは「李太王殿下」という表記が散見する。したがって、朝鮮人にとって李太王の呼称が嫌忌すべきものではなかったことがわかった。

国立中央図書館では併合後の実録編纂に関連する史料を調査した。実録の編纂は朝鮮王朝儀軌の宮内省移管と深くかかわっており、王公族研究の根幹をなしているといえる。今後も史料を収集し、見識を深めていきたい。

こうした研究環境にめぐまれ、昨年は多くの着想を得られた。特に関心をもって分析しているのは、王公族の離婚・離縁と戸籍の行方についてである。朝鮮では同族相婚を禁じていたので、ひとつの血族で構成された王公族の場合、女性の嫁ぎ先は必ず別の身分であった。しかも、いったん王公籍を離れると再び王公族には戻れなかった(王家軌範第26条)。こうした状況で離婚した場合、果たしてどこに戸籍を移動したのだろうか。

瑣末でマニアックな論点と思われるかもしれない。しかし、王公族の戸籍の問題は、最近話題となった女性宮家創設の議論ともわずかながら関係している。両陛下が頼りにする黒田清子氏を女性宮家に迎える待望論が一時期もりあがった。皇族も王公族と同様、いったん皇籍を離れると皇族には戻れない。それゆえ、黒田清子氏を宮家にするには皇室典範の改正が必要となる。王公族の事例でも、皇室典範に相当する王家軌範の改正が議論された。しかしそれは回避される。なぜか。それを解明するのが現在の課題である。

もちろん王公族の戸籍問題が女性宮家を考えるヒントになると考えているわけではない。しかし、いままで見過ごされてきた王公族に着目することで、皇室制度や近代史の新たな諸相が見えてくると信じている。

- 1.旧韓国皇室には王や公の尊称が付与されたため、王公族といわれた。
- 2.王世子の配偶者を選ぶ制度。初揀択、再揀択、三揀択というように三段階にわたって選抜した。ただし、李垠は初揀択のみを行った。



フェローシップ中に全州李氏大同宗約院の社稷大祭を見学
(出典:筆者撮影)



李垠の大甥で全州李氏の第30代当主をつとめる李源氏(出典:筆者撮影)



しんじょう みちひこ
新城 道彦

PROFILE

2010年3月、九州大学大学院比較社会文化学府博士學位取得。2012年4月より新潟大学大学院現代社会文化研究科助教。専門は東アジア近代史。著書に『天皇の韓国併合』(法政大学出版局、2011年)などがある。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2012年度第3四半期(2012年10月1日から12月31日まで)の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国教員 (第1団)	具滋洪(ク・ジャホン) 彌陽高等学校 校長	20	9	11	10/8~10/17	加美町立東小野田小学校 加美町立小野田中学校 愛媛県立今治西高等学校 ★南三陸町(宮城)
韓国教員 (第2団)	金鍾雲(キム・ジョンウン) 三峰初等学校 校長	20	9	11	10/8~10/17	加美町立東小野田小学校 加美町立小野田中学校 広島県立広島観音高等学校 ★南三陸町(宮城)
韓国教員 (第3団)	鄭仁仙(チョン・インソン) 冠陽中学校 校長	20	8	12	11/26~12/5	七ヶ浜町立汐見小学校 七ヶ浜町立向洋中学校 愛知県立木曽川高等学校 ★七ヶ浜町(宮城)
韓国教員 (第4団)	李秉允(イ・ピョンユン) 国立国際教育院 教育研究官	20	8	12	11/26~12/5	七ヶ浜町立汐見小学校 七ヶ浜町立向洋中学校 香川県立高松西高等学校 ★七ヶ浜町(宮城)

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国大学生 (第3団)	李杰宰(イ・ゴルジェ) 建陽大学校 教授	26	9	17	10/29~11/7	岩手県立大学 和歌山大学 ★宮古市(岩手)
韓国大学生 (第4団)	洪性秀(ホン・ソンス) 国立国際教育院 書記官	27	11	16	10/29~11/7	岩手県立大学 北海道大学 ★宮古市(岩手)

団体名	団長	計※1	男※2	女※2	期間	主な訪問先
韓国高校生 (第1団)	権金年(クォン・グムヨン) 国立国際教育院 研究官	49	20	24	10/23~10/29	愛知県立刈谷高等学校 愛知県立刈谷北高等学校 ★潮来市(茨城)
韓国高校生 (第2団)	梁在吉(ヤン・ジェギル) 長安高等学校 校長	49	17	27	10/23~10/29	和歌山県立神島高等学校 ★潮来市(茨城)
韓国高校生 (第3団)	朴龍南(パク・ヨンナム) 中山高等学校 教頭	50	21	24	11/6~11/12	都立小平高等学校 ★潮来市(茨城)
韓国高校生 (第4団)	文永澤(ムン・ヨンテク) 済州特別自治道教育庁 奨学官	50	19	26	11/6~11/12	都立小岩高等学校 ★潮来市(茨城)

訪日団は、★印の被災地を訪問し、現地視察や学生との交流会、学校訪問などを行いました。

※1 引率含む ※2 生徒のみ



【教員訪日団(第3団)】
向洋中学校の2年生とともに韓国の民謡を歌った



【高校生訪日団(第2団)】
整備活動として雑草抜きに取り組む団員(潮来市・前川あやめ園)



【高校生訪日団(第3、4団)】
潮来市の青少年と交流

訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
日本教員 (第2団)	穴戸弘徳 岩手県奥州市立前沢中学校 教諭	17	9	8	11/13~11/22	慶熙大学校 釜山外国語大学校 三峰初等学校 弥陽高等学校 冠陽中学校

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
日本大学生 (韓国外交通商部招聘)	堀江麻友巳 外務省国際協力局 民間援助連携室事務官	29	5	24	10/2~10/11	韓国外語大学校

団体名	団長	計 ^{※1}	男 ^{※2}	女 ^{※2}	期間	主な訪問先
宮城県高校生	多賀努 宮城県宮城野高等学校 教頭	49	4	43	10/21~10/27	中山高等学校
岩手県高校生	鈴木俊 盛岡中央高等学校 教頭	53	16	34	11/18~11/24	長安高等学校

訪韓団は、東日本大震災の被害や復興状況について韓国で発表を行いました。詳しくはp4をご覧ください。^{※1 引率含む} ^{※2 生徒のみ}



【宮城県高校生訪韓団】ホストファミリーと別れを惜しむ



【岩手県高校生訪韓団】韓国の学生にチャンゴを習う

2 「日韓交流おまつり2012 in SEOUL」関連事業

2012年10月3日にソウル市内で行われた「日韓交流おまつり2012 in SEOUL」出演団体に対する支援を行いました。東北から参加した3つのチームは、それぞれの出番で力強いパフォーマンスを披露しました。

また今回の参加は、「キズナ強化プロジェクト」の一環でもあることから、特設ブースで東日本大震災からの復興の様子を写真で紹介する活動も行いました。ミス着物の海老澤佳奈さん(茨城県出身)が艶やかな着物姿でPR役を務め、ブースは、その姿に足を止め記念撮影をしたり、写真の説明に聞き入ったりする人びとでにぎわいました。

- 八戸大学・八戸短期大学(青森ねぶた・五所川原立佞武多)
- 岩手県立宮古水産高等学校(太鼓部)
- 福島県立塙工業高等学校(和太鼓愛好会)
- ミス日本ミス着物



【福島県立塙工業高等学校和太鼓愛好会】会場入口でデモンストレーションを行う

日韓文化交流基金事業報告

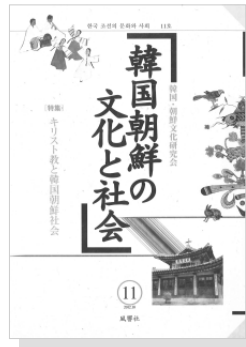
3 アジア国際子ども映画祭参加訪日団

アジア国際子ども映画祭(本選11月24日(土)、兵庫県南あわじ市)に参加するため、韓国から中学生8名を11月20日(火)から25日(日)までの6日間招聘しました。この映画祭には日本のみならず海外11の国と地域より子どもたちが参加します。そこで異なる国や地域の作品を互いに鑑賞し合うことで、相手国の文化や習慣、自分たちの考えとの共通点や相違点などを知ることができ、相互理解の強化および友好関係の構築を図ることができると考えられています。

今回は「キズナ強化プロジェクト」の一環であるため、一行は映画祭への参加に加え、千葉県浦安市などの被災地で視察や被災者との交流を行い、また淡路高等学校を訪問し、学生間交流や防災学習などを行いました。

4 学術定期刊行物助成

人文社会科学分野の学会・研究会の研究成果として刊行される学術定期刊行物を支援する事業です。2012年度助成対象団体より、次の研究成果物が刊行されました。



『韓国朝鮮の文化と社会11』
(韓国・朝鮮文化研究会編、風響社)



『現代韓国朝鮮研究』
(現代韓国朝鮮学会編、中西印刷株式会社)

5 韓日文化交流基金訪日団

韓日文化交流基金の第25回訪日団が2012年11月29日(木)から12月1日(土)まで来訪しました。29日(木)には、当基金の鮫島章男会長主催の晩餐会を開催し、意見の交換を行いました(於ホテルオークラ東京)。

訪日団団員(韓日文化交流基金役員および関係者)

李相禹(イ・サンウ)	韓日文化交流基金理事長、元翰林大学校総長
孔魯明(コン・ノミョン)	元外務部長官、元駐日本大使
玄鴻柱(ヒョン・ホンジュ)	元駐米大使、金&張法律事務所顧問
柳明桓(ユ・ミョンファン)	元外交通商部長官、元駐日本大使
姜天錫(カン・チョンソク)	朝鮮日報主筆
尹徳敏(ユン・トクミン)	韓日文化交流基金運営諮問委員、国立外交院教授
朴喆熙(パク・チョルヒ)	ソウル大学校国際大学院教授
金秀雄(キム・スウン)	韓日文化交流基金理事・事務局長

6 賛助会員

2012年10月1日～12月31日の期間に、個人会員24名の方に賛助会員制度にご加入いただき、28万円の会費収入となりました。

皆さまの厚意に深く感謝申し上げます(五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数)。

個人

朝倉敏夫	浅野豊美	阿部孝哉(3)	石川武敏
磯崎典世	越智通雄	金丸守男	菅野修一
岸真清	小針進	櫻井浩	柴公也
芹川哲世(2)	都恩珍	中山隆夫	中山武憲
平田辰一郎	福原裕二	藤本幸夫	洪宗郁
松井貞夫(2)	茂木敏夫	余田幸夫	渡辺浩

訂正とお詫び

『日韓文化交流基金NEWS 第64号』p4におきまして、名称の誤表記がありました。
誤) 静岡県立グローバルセンター
正) 静岡県立大学グローバル地域センター
訂正してお詫び申し上げます。